

黒毛和種牧場の運営概要と改善・整備すべき事項

(畜試 経営部、外山分場)

1. 背景とねらい

最近における県内黒毛和種牧場の運営概要と利用率の向上に向けて改善・整備すべき事項が利用実態調査から明らかになったので、牧場運営管理指導上の参考に供する。

2. 技術の内容

1) 黒毛和種牧場の運営概要 (40牧場)

① ほとんどが夏期放牧で5割が黒毛専用 (以前は乳牛や短角放牧が多い)、5割が乳牛または短角との混牧であり、管理運営面で牧野間に格差が見られる。

② 別飼い施設や放牧子牛の発育向上等の体制整備が遅れていることもあり、放牧強度及び経営収支ともに県下の公共牧場の平均と比べて低い。

なお、事業収入の大部分 (84%) が放牧料であり、預託頭数の確保が重要な課題となっている。(表1)

2) 利用率向上に向けて改善・整備すべき事項

① 放牧する理由としては、労力節減や飼養管理費の節減、粗飼料不足、不妊牛の改善などが多い。また、放牧していない理由として、放牧疾病や事故が心配、少頭数のため自家で飼える、子牛の発育が悪いなど多い。

② 牧場に対する要望としては、大別してア. 人的 (看視人) 体制、イ. 飼養管理技術、ウ. 施設整備面の3点の改善、向上に集約されるが、具体的には次のとおり。

○牧場の機能強化

- └ 放牧病、事故対策
- └ 受胎率の向上対策

○利用農家、地域との連携

- └ 放牧効果のPR等
- └ 農家負担の軽減 (出役ほか)

○支援対策

- └ 運営経費への助成
- └ 共済制度の充実

3. 指導上の留意事項

当該牧場の管理運営水準及び利用農家のニーズ等を把握して改善事項を特定して行く必要がある。

4. 試験成績の概要

表1 黒毛和種公共牧場の運営概要

項目	概要
経営類型	<ul style="list-style-type: none"> ・38牧場が夏期放牧タイプ、3牧場（大迫町公社牧場、胆沢町営牧野、一関市須川牧場）のみ周年飼養 ・利用畜種は19牧場（5割）が黒毛専用（以前は乳用牛や短角牧場）、21牧場が乳牛や短角との混牧（乳牛との混牧が18牧場）
利用及び家畜管理	<ul style="list-style-type: none"> ・利用戸数（平成7年7月1日現在）は約1,900戸 （前項の(A)対比11%、(B)対比9.4%、(C)対比10.8%の利用率） ・放牧牛の群分け、月齢等 ○母牛（種付け牛群と妊娠牛群に分けている例が多い） ○育成牛（概ね10ヶ月齢以上）は、初放牧牛や後継牛（自家産及び市場購買した牛）が多い。 ○子牛（親子放牧が多く、この場合子牛月齢が1ヶ月以上としている例が多い） <ul style="list-style-type: none"> 〔月齢4～5ヶ月で山下げ→市場対応〕 〔そのまま放牧 → 後継牛〕 ・種付け方法 人工授精、まき牛併用が2牧場で他の38牧場は人工授精 ・体重測定 実施18牧場（全牛14、母牛のみ1、子牛のみ3） 実施せず22牧場 ・牧場での分娩 大迫町公社牧場ほか4ヶ所 （ほとんどが4～5ヶ月齢で山下げ→市場対応） ・看視体制 1牧場平均 常時2人（1人～5人） 臨時雇用年間延べ48人
草地管理	<ul style="list-style-type: none"> ・施肥回数は1～3回（平均で1.6回） ・施肥管理方法は、直営が19牧場（5割）、委託が13牧場（3割）、受益農家の共同作業が8牧場（2割） ・コンパクト乾草など粗飼料販売を行っている牧場が20牧場 ・林間放牧を行っている牧場が1/3の13牧場